

## 2022年度 卒業論文へのコメント

牲川 波都季

### 作曲のための楽曲分析

尾田 基綺

p.1

初めて作曲してみようとする者にとって、必要な機器(ソフト)と基礎知識をまとめた上で、近年のヒット曲の曲調・歌詞等を分析しヒットの理由を探ろうとした論考。

基綺さんにとっては自身の将来の職業選択とも関わる内容であり、作曲についての理解を深めることが第一の目標だった。ただし、私のゼミは、ゼミ生の研究テーマ・分野がそれぞれまったく異なっていることもあり、知識のない者に理解可能な形で言語化することを求めている。そのため基綺さんは、直接聞いたり楽譜を見れば容易に理解できる「音」を文章で説明しなおす必要があった。

基綺さんの論文は、和音(コード)やその組み合わせを一つひとつ説明したのち、二つの楽曲をセクション別に分析し、通常のコード進行からの逸脱や以前のセクションの進行との違いから、作曲者の「物語」を浮かび上がらせた。まったく知識のない読者に、もしかしたら自分も作曲ができるかもしれないと思わせてくれる論考である。

### 奈良県の人口減少と今後の展望について

木下 明彦

p.21

奈良県の人口減少の現状を文献から概括し、その理由を友人へのインタビューから予想したのちに、他の地方自治体の先進事例から打開策を提示しようとした論考。

インタビューでは、伝統と利便性を兼ね備えた理想的なベッドタウンだが、長期滞在を促すほどの観光資源には乏しいという、若年層から見た奈良県の位置づけが率直に語られた。また、企業誘致やインバウンド需要の取り込みに成功した九州の事例、サッカーチームとの連携やサイクリングの観光化といったスポーツ活用の事例は興味深く、それぞれ端的によくまとめられている。

明彦さんは、研究の問いを十分に検討する時間がもちにくかった。本来は、奈良県の現状をより正確に把握する必要があったと思う。奈良県の人口減少率がそれほど高くなく、その理由を考えてみてほしかった。とはいえ、明彦さんは、大変困難な状況の中で、一定の筋道をもった論文を仕上げることができた。この力を活かしてほしい。

## アルバイト経験から考える補習塾の可能性

児嶋 七瀬

p.37

アルバイト先の塾で出会った、対応困難な児童生徒 4 名について、背景や様子を観察し、論者、運営者、先行研究それぞれの観点から教育支援のあり方を提案した論考。

電話で語り掛けることしかできなかった A さんについては待ち続ける、攻撃的な言動が目立つ B さんについては感情に共感する、衝動の制御が難しい C さんについてはタスクを細分化する、文章読解が難しく集中力が続かない D さんについては文章と作業を区切る。これらは七瀬さんが提案した支援の一部である。

私からは、アルバイトの立場で心身を削りながら教育に携わる必然性はないのではと助言したこともあった。しばらくたって七瀬さんはこの塾を辞めたのだが、そのときまで工夫を凝らし続け、辞めたのちも卒論のテーマは変えなかった。粘り強く実践し探した過程が論文として結実した。教育に携わる私には身につまされる事例も多々あり、学校外の教育活動の一端もうかがうことができた。貴重なフィールドワークの成果である。

## 日本人女性が子育てと就労を両立させていくためには

重本 桃花

p.57

公的調査から日本における女性の就業の実態を示し、就業継続を可能にするための育児休業制度の仕組みと意義について、先行研究を踏まえ述べた論考。

桃花さんは当初、家族の親密性の重要性を主張しようとしていたが、ゼミで、親密であることが難しかったりそこに価値を見出さない家族もあることを知った。迷ったのち、家族と親密でありたいと望む者がそれをかなえるためにはという問いに至った。

ゼミで複数の立場を知ったことが、既存の統計データや研究を十分に活用し、一步一步、説得的に論じていく卒論につながった。M 字カーブが相当ゆるやかになっていること、取得率はまだ低いのが育休制度自体は世界的に見て整備されていることなど、私も新しい知見を得ることができた。ただ、育休制度取得以前の問題として、子どもをもつこと自体が特権なのではないか。管理職に昇り詰める女性と非正規雇用の女性との差も気になる。こうした問いを呼び起こしてくれる、論旨明快な好著だ。

## 滋賀県の県民性とそのイメージ

篠原 日向子

p.78

滋賀県を対象に、県民性イメージを「内」「外」に分け、滋賀県史から「正直、堅実」「儉約、勤勉」というイメージの出所を論じ、現在への一般化に疑問を呈した論考。

日向子さんは関東から関西へと引っ越し、現在は滋賀県に居住している。その間に、人々の行動様式に異質性を感じることもあり、県民性が原因ではないかという仮定で文献調査を始めた。調査結果によれば、文化人類学や一般書の多くは、滋賀県民を「近江商人」気質を持つ者と描き出してきたという。しかし、その気質とは異なる傾向が、「平等」を重視する天台宗の信仰、現在の県人会活動、NHKによる調査結果から見られるのであり、滋賀県民を「近江商人」気質でひとくりにすることには無理がある。

論文の結論は、一県民をまとめあげるような性質は存在しないが、同じカテゴリーだと認識する者が集まると、特異な行動をとろうとするのではないかというものである。日向子さんは進級論文以来、人々の相互行為に興味を持ち続けてきたのかもしれない。

“推し活”はメンタルケアになり得るのか

角野 由芽

p.97

ジャニーズなどのアイドルの推し活の実情を、自身と友人という二つの事例から記述し、推し活がメンタルヘルスの維持や回復に寄与する可能性を示してきた論考。

幼稚園での出会いから現在までのやや落ち着いた推し活に至るまで、由芽さんが自身のアイドルへの傾倒を分析的かつ情熱をもって描き出している箇所が特に印象的だった。執筆途中で、由芽さんは自分の経験や感情について話すことならいくらでもできるが、書くことが非常に難しいとこぼしていた。けれども、話すように書けばよいとの助言に応じてくれたようで、推し活を通じた由芽さんのこれまでが思い浮かぶ事例紹介となった。インタビュー調査でも、由芽さんの関心の深さからくる質問により、Sさんの推しへの想いが汲みだされていた。

執筆の最終盤になり、メンタルヘルスへの効果という仮説が浮かび上がった。もう一度インタビューできていたらとは思いますが、「沼っていく」活動を捉えた論文となった。

## 英語による人格形成と将来

高尾 匡哉

p.115

先行研究やインタビュー調査から、英語学習に対する否定的態度の要因を述べ、肯定的態度を育てることの必要性とそのための方策を提案しようとした論考。

匡哉さんは、英語学習と使用に肯定的であり、このよさを他の人にも伝えたいと論文執筆を始めた。しかしゼミで質問を受けたり先行研究を読む中で、英語学習は日本人の多くに役立つはずだという前提に迷いが生じた。この迷いを活かして、前提自体を徹底的に検証する、または大勢ではないにせよどのような人にならどのように役立つのかを探る道もあったように思う。中学校時代の英語教員のインタビュー結果は、後者の問いに答える非常によい事例の一つになりそうだ。正規職を得ている成人にとり、英語能力は、職・居住地の選び直しの希望を抱かせる資源なのではないか。

意見や文献から新たな発見を得るという匡哉さんの力を、発見に基づき問いを練り直す力へとつなげていってほしい。信念を物語へ、物語を論証へと変えていくために。

## 「能力」の拡張—台北近郊都市基隆市の教育事情

杜 於恒

p.129

台湾の教育制度と教育改革の現状を概括したのちに、台北の近郊都市である基隆市の中等教育の現状と課題を公的データとインタビュー調査から明らかにした論考。

台湾政府は2019年に「12年国民基本教育」という新方針を打ち出し、初等・中等教育の改革を行った。そこで重視されている能力は、「自主行動」「溝通互動」「社会参与」だという。日本の新学習指導要領で示された資質・能力より、行為としての実現性が重視されており印象的だ。ただ、杜さんの調査によれば、そのように拡大した能力観に、親も教育現場も対応できていない。進学校のベテラン教師であるB先生でさえ、親としての教育方針を定めきれないでいる。技能・知識を超えた力という目標は、そのあいまいさゆえに、文化資本を備えた家庭・地域に圧倒的に有利なのではないか。

杜さんは、研究の問いと方法を見つけ、どんどん行動に移し書いていった。日本に留学したことも含め、改革前の教育を受けた杜さんの実行力はどこからきたのだろうか。

小学 1~2 年生の小学校への送り迎えがなぜ必要であるか

中田 彩瑛

p.152

児童のみで登下校することの危険性について、各種の公的データから事例別に述べたのち、保護者による送迎の必要性と難しさ、支援策についてまとめた論考。

彩瑛さんがこの問題を取り上げ始めたとき、他のゼミ生の反応は芳しくなかったと記憶している。日本では、児童生徒だけで登下校することが自然で、一人での留守番も続けられてきたためだろう。しかし彩瑛さんの調査によれば、特に小学校低学年の間は交通事故に遭う率が高く、災害や犯罪の恐れからしても成人による送迎が望ましいと言える。共働き家庭が増えていることから、現状では保護者による送迎は難しいとして、彩瑛さんは、学童保育の充実やスクールバスの利用促進を提案して論文を終えた。

今後、この提案は日本で実現されるのだろうか。子育てに対するイメージ、児童虐待関連法などの国際比較にもつながる、問題提起的な結論だ。

大阪女学院中学校・高等学校の校風と制服の歴史

樋口 いつか

p.170

大阪女学院中学校・高等学校の創設以来の歴史と校風、各時代の制服の特徴や変遷の理由を、学校に残る史料とインタビュー調査から跡付けた論考。

いつかさんは、キリスト教主義を柱とした責任ある自由という校風に強く共感するとともに、それが現在の自分の一部を築いてきたという認識をもっていた。その校風の象徴として、卒論では制服を取り上げることにしたが、現在の、パンツスタイルも選べる制服に至るまでに何度も変化してきたことを知り、背景にある学校の歴史も含めた詳細な記述を試みた。1970 年前後の学生紛争と女性解放運動の時代に、生徒らの意向に基づき制服を制定していったこと、その際、アパレル企業にデザインを発注したこと、また 2000 年ごろより、セクシャルマイノリティの意志尊重という観点からパンツスタイルの導入を議論していたことが特に印象的だった。

時代と焦点を絞ってもよかったとは思いますが、出身校のよさを十分に確認し、そのよさとともに、今後のいつかさんもありつづけていくであろうことを予感させる文章である。

広島県内の公立学校で持続的なコミュニティ・スクール制度を実現するにはどうすればよいのか

槇田 雪乃

p.184

近年、政策的に推進されているコミュニティ・スクール制度（CS）について、広島県尾道市と他の地方自治体のケースをもとにその持続的で効果的な運用を探った論考。

雪乃さんの関心は、一貫して、地域で子どもをよりよく育てていくことにあったと思う。子どもが地域を離れたとしても、地域とともに育ったのならば、やがて戻ってくるかもしれない。これをかなえる環境づくりに寄与する制度として、雪乃さんはCSに着目し、全国規模の研究大会にも足を運んで、地元尾道市への適用の在り方を考えた。ところが調べてみると、学校設置から地域住民が行うという元々の理念と、現在の政策目標や制度、さらに教育現場とで、CSの目標にも方法にもずれがあることが見えてきた。

CSは教育政策なのか地域活性化政策なのか。大人の自治意識が薄れている現状をどうとらえるか。雪乃さんには、教育者かつ住民として考え、解決に臨んでほしい。

生活充実度とオタク活動の関係性

森脇 帆乃香

p.207

K-POP などアイドルに対する推し活への熱量と、日常生活の多忙さ・充実度との影響関係を、自らを含む4名の事例から詳細に調査した論考。

進級論文でK-POPファン独特のオタク文化を追った帆乃香さんは、社会人になっても熱量をもって推し続けるにはという新たな問いをもち、インタビューによる事例研究を行った。自分とAさんは間もなく社会人になる学生、Bさん、Cさんはすでに社会人である。推す対象や、過去と現在の推し活の仕方には違いがあるが、年齢が上がるにつれSNSの利用が減ったという共通点があった。また、年齢上昇後も熱心に推し活を続けている人は、グッズ購入やSNS利用から、ライブ参加へと活動の中心が移っていくこともわかった。Bさんの、K-POPの推し活には韓国語が必要で忙しいとしんどい、YouTubeのほうがテレビより気軽な媒体という話が、私には思いがけなく、印象に残った。

帆乃香さんの推し活は、直接人と会うことを重視する。就業後の推し活はどのように変わっていくのだろうか。A・B・Cさんのその後も追いつけたいような研究だ。

組織マネジメントに求められるものとは

山崎 辰一郎

p.225

準硬式野球部, 政治体制, メーカー企業を例に, 文献およびインタビュー調査から, 組織と個人の両者が成果を挙げうるマネジメントの在り方を明らかにした論考。

辰さんは, 準硬式野球部で内野手リーダーを務め, 4年次に関西選手権に優勝した。しかしその後の全日本大学選手権では, 初戦で敗退してしまった。野球部はボトムアップ型で組織されており, そうした組織作りを進めた当時のキャプテンの話や, 歴史上の政治体制としての民主主義の有利さからは, ボトムアップ型組織に問題はないように思える。しかし辰さんは, 中間管理職の現役会社員に対するインタビューから, チームが「見せかけのボトムアップ型」に陥っていたという問題に行きついた。そして, 改善策として, 問題追及ではなく解決のためのやりとり, ダイナミックな組織作りなどを提示した。

辰さんは, 自ら研究を着実に進めつつ, ゼミ活動の中ではファシリテーターの役割を果たしてくれた。そんな辰さんに, 私のゼミ運営はどう見えていたのだろうか。

以上

2023年2月7日